【身近な歴史文化の特徴】

広い札幌市の中である特定の地域を特徴づけ、そこで語られ守られてきた身近な歴史文化の特徴を以下に整理します。そのほか、市民ワークショップや策定委員会で挙げられたものを中心に地域の身近な歴史文化の特徴を整理しました。なお、身近な歴史文化の特徴についても、今後市民とのワークショップなどで導き出していくことが考えられます。

■身近な歴史文化の特徴

- 北海道防備と農業開拓に努めた屯田兵
- 産業と暮らしを支える札幌軟石
- 様々な建造物に使われ白石のまちに今も息づくレンガ
- 市民に愛され走り続ける路面電車
- ななめ通りにみる幕末からの街道と産業の歴史
- 住民が発見しまちを築いた手稲鉱山
- 採石場から市民が集う場へ変身を遂げた五天山公園
- 宇都宮仙太郎が牽引した酪農
- 月寒を軍都とした陸軍第七師団歩兵第 25 連隊

・北海道防備と農業開拓に努めた屯田兵

屯田兵制度は開拓使の次官であった黒田清隆が永山武四郎などの意見をもとに建議し、明治維新後に職を失った士族に仕事を与えつつ、北海道の防備を固めると同時に農業開拓に当たらせることを目的として明治 7 年(1874 年)に制定されました。志願者は屯田兵の家である兵屋と土地、移動費、家具や農具、制服、最初の 3 年間は扶助米などが与えられ、家族を連れて東北など様々な地域から移住してきました。札幌では、明治 8 年(1875 年)に 198 戸 965 人が移り住んだ琴似を始めとして、以降、発寒、山鼻、新琴似、篠路と各地域に多くの人々が入植しました。

明治 37 年(1904 年)に屯田兵制度が廃止されて約 30 年の歴史に幕を閉じましたが、出征や開墾の苦労を共に乗り越えた兵村の人々は、その後も村民として生活し、それぞれの地域特有の暮らしや文化、精神を今に伝えています。

屯田兵から受け継ぐまちづくりの心
出典：北区役所 HP

・**産業と暮らしを支える札幌軟石**

明治 5 年(1872 年)に南区石山でお雇い外国人だった土木技師Ａ・Ｇ・ワーフィールドと地質鉱物技師トマス・アンチセルによって軟石が発見され、明治 8 年(1875 年)に本格的な採掘がはじまりました。この軟石は、「約 4 万年前」（※要確認）に支笏カルデラ（支笏湖を形成した火山活動）で大規模な火砕流が発生した際の噴出物が、高速で流下し固結したもの（支笏噴火溶結凝灰岩）と言われています。加工しやすく保湿性や耐火性にも優れており、最盛期には年産 30 万個、100 軒以上の石材店がありました。しかし、大正時代にコンクリートが登場し、現在では札幌軟石を採掘・加工販売している業者は 1 軒のみとなっています。

札幌軟石採掘場跡
出典：南区役所 HP

軟石を使った建物としては旧札幌控訴院（現札幌市資料館）や八紘学園のサイロが有名ですが、リンゴ倉庫や玉ねぎ倉庫などにも使われ、札幌の農業を支えてきました。平成 30 年には、札幌軟石が北海道遺産に選定されました。最近では軟石を生かした公園や雑貨、古い建物をリノベーションしたカフェなどが人気を呼び、軟石が持つ独特の優しい雰囲気は今も愛され続けています。

・**様々な建造物に使われ白石のまちに今も息づくレンガ**

明治 15 年(1882 年)の幌内鉄道開通当時、白石沿線でレンガに適した粘土が発見されました。当時、設計者だった平井晴二郎から信頼を得ていた鈴木佐兵衛は明治 17 年(1884 年)に鈴木煉瓦製造場をつくり、そのレンガはサッポロビール工場や東京駅など様々な建造物に使用されました。平井が設計した北海道庁赤れんが庁舎にも使われ、さらに重要文化財である「旧手宮鉄道施設 機関車庫 3 号」（小樽市総合博物館にて一般公開）にも使われたのではないかと推察されています。

大正 11 年(1922 年)に工場が閉鎖されるまでの 30 年以上、レンガは札幌の街づくりに大きく貢献し、現在もスーパーやＪＲ白石駅の外壁に使われるなど白石のまちに息づいています。

鈴木煉瓦製造場の干場（明治 19 年）
出典：白石区役所 HP（白石歴しるべ）

・市民に愛され走り続ける路面電車

現在の市電の原点は馬車鉄道です。明治 7～8 年（1874～1875 年）頃から現在の石山で軟石の発掘が始められ、木造開拓使庁舎の火事による焼失から石造り建築が奨励され、軟石の需要も高まりました。そうした中で馬車鉄道が開通となり、明治 37 年（1884 年）には「札幌石材場鉄道合資会社」が設立。明治 42 年（1909 年）には、乗客の運搬も開始されました。明治 45 年（1912 年）には「札幌市街馬車鉄道株式会社」と名を改めて札幌各地域に路線を拡大しました。

大正 7 年(1918 年)に設立された「札幌電気軌道株式会社」による市電が走り、昭和 2 年(1927 年)に市営化されて以来、今も市民の足として長く親しまれています。最盛期には新琴似駅前方面や円山公園、豊平駅前、苗穂駅前方面にも路線が延びましたが、地下鉄の開通等で徐々に縮小していきました。一時は全面廃止の危機もありましたが、市民の熱望により存続となり、現在の 1 路線となりました。その後はループ化や新型車両の導入など時代の変化に対応しながらも、一方で旧型車両とＬＲＴ（近代的・高機能な路面電車）とを共存させ、多くのファンを魅了し続けています。

また、車両の前後に取り付けた竹のササラを利用した除雪装置で路線の雪を掃き飛ばし、積雪が線路の障害にならないように冬の路面電車線路を守っているササラ電車は、札幌の冬を彩る風景の一つとなっています。

ササラ電車
出典：札幌観光写真ライブラリー

・ななめ通りにみる幕末からの街道と産業の歴史

正式名称を「北海道道 273 号花畔札幌線」と言い、「元村街道」「ファイターズ通り」などとも呼ばれています。元々はけもの道だった元村街道は明治 6 年(1873 年)に早山清太郎によってつくられ、茨戸～篠路～丘珠～元村を経て創成川に至り、開拓時代は札幌と石狩を結ぶ重要な道路でした。

当時、ななめ通りがある東区南西部の一帯はたまねぎ栽培に適した土地・環境で、有数のたまねぎ産地となりました。その技術は現在も受け継がれ、札幌黄というブランドも生み出しています。

たまねぎと東区
出典：東区役所 HP（札幌黄の歴史）

道路に沿って帝国製麻工場跡やサッポロビール工場跡、神社が多く並び、大友亀太郎の役宅があった場所に建てられた札幌村郷土記念館や玉ねぎ発祥地記念碑など、札幌の経済発展に大きく貢献したことが伺えます。

・住民が発見しまちを築いた手稲鉱山

明治 20 年代半ば、星置の農家だった鳥谷部弥平治によって手稲山で金鉱脈が発見され、昭和 3 年(1928 年)に広瀬省三郎が探鉱を始めて以降、三菱鉱業など様々な企業の手によって鉱山が経営されました。

鉱山内のジオラマ
撮影場所：手稲西小学校（鉱山の部屋）

昭和 10 年(1940 年)から昭和 17 年(1942 年)の最盛期には東洋第二の鉱山とまで呼ばれ、鉱山周辺には手稲の人口の約 4 分の 1 が集まった「鉱山村」ができ、活気に満ちあふれていました。しかし、国の政策の転換や操業成績の低下などによる事業縮小を繰り返し、昭和 46 年(1971 年)に完全閉山となりました。

手稲西小学校の「鉱山の部屋」には、旧手稲鉱山の採掘現場を再現した展示や鉱山にまつわる品々が展示されています。数々の展示の中でも、昭和 11 年(1936 年)に当時の子どもたちが描いた 58 枚のクレパス画は、約 80 年前の手稲のまちの記憶を今でも私達に伝えてくれています。

・採石場から市民が集う場へ変身を遂げた五天山公園

かつての採石場跡地に作られた五天山公園は、五天山や自然を満喫しながらバーベキューやパークゴルフができる西区で初めての総合公園です。標高 303.5mの五天山は一部が階段状になっており、ピラミッドのようにも見えます。斜面が削り取られて崖になっている様子からは、五天山が昔砂利石をとる場所であったことが窺えます。

245.870 ㎡の敷地を持つ公園内には、かつて水田地帯だった西野地区に存在していた水車を復元し、その西側にはホタルや水生生物などの生育が可能な「ホタルの小川」が整備されていいます。

五天山公園
出典：五天山公園 HP

また、ホタルの幼虫やサンショウウオなどの五天山の生物について学習できる「環境学習館」もあり、子どもからお年寄りまで四季を通じて楽しむことができます。総合公園としての魅力だけではなく、旧採石場としての歴史と、環境学習の場としての魅力も併せ持っています。

・宇都宮仙太郎が牽引した酪農

酪農を志し 19 歳で大分県から北海道へやってきた宇都宮仙太郎は、その 2 年後にアメリカへ渡って本場の酪農技術を身に着け、明治 24 年(1891 年)に札幌市内で市乳の販売とバター製造を始めました。明治 28 年(1895 年)には北海道初の民間酪農団体「札幌牛乳搾取業組合（四日会)」を設立し、仙太郎を中心に技術や処世術等について活発な議論がなされました。数年後再び渡米した仙太郎はホルスタイン種牛を輸入して帰国し、日本の乳牛改良発展の基礎をつくりました。さらに「札幌酪農組合」を設立し、組合長としてデンマーク農業の導入にも努めました。

大正 14 年(1925 年)、仙太郎に師事していた黒澤酉蔵らとともに、雪印メグミルク株式会社の前身となる「有限責任 北海道製酪販売組合」を結成し、酪農民の経営による酪農民のための組合が誕生しました。また、仙太郎は娘婿だった出納陽一にデンマーク留学をさせ、大正 13 年(1924 年)には現在の厚別区上野幌に共同経営で宇納牧場を開設しました。昭和 8 年（1933 年）には、黒澤酉蔵が酪農学園大学の前身である北海道酪農義塾を開校し農業に関わる人材育成に着手しました。

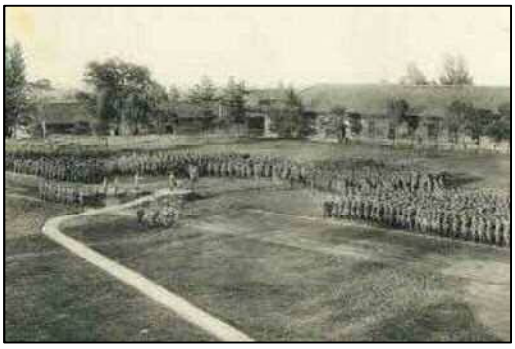
上白石にあった宇都宮牧場の模範牛舎とサイロ（大正 3 年撮影）
出典：札幌市 HP

日本酪農の父と呼ばれた宇都宮仙太郎は、先進的な酪農の研究・実践、品種改良、酪農後継者の教育、組合組織の発達に大きく貢献し、札幌だけではなく日本の酪農も牽引し続けました。

・**月寒を軍都とした陸軍第七師団歩兵第 25 連隊**

札幌が徴兵令適用地域となった明治 29 年(1896 年)、屯田兵制度にとって代わるものとして、月寒に屯田兵を母体とした陸軍第七師団独立歩兵大隊が設置され、1,730 人の現役兵が入営しました。明治 32 年(1899 年)には陸軍第七師団歩兵第 25 連隊と改称し、月寒は「歩兵第 25 連隊のある村」としてその名を知られるようになりました。明治 42 年(1909 年)には札幌初の水道として歩兵第 25 連隊用の月寒上水道が完成し、現在西岡公園となっている西岡水源地がその貯水池として使われていました。

明治 43 年(1910 年)に豊平町が一部を残して札幌区に編入し、町役場が豊平から月寒に移転したため、当時月寒に通じる道がなかった平岸地区の人々にとっては大変不便となりました。彼らの要求により「平岸連絡線」が造られることとなりましたが、水田の埋め立て等で難工事が予想され、町は歩兵第 25 連隊への協力を依頼しました。明治 44 年(1911 年)、約 4,000 人の兵士が演習の名目で工事を開始し、住民も協力して約 5 か月後には道路が完成しました。工事の期間中、町は感謝の気持ちを込めて兵士一人につき毎日 5 個のあんぱんを提供したことから、この平岸連絡線はアンパン道路と呼ばれるようになりました。昭和 15 年(1940 年)、歩兵 25 連隊と入れ替わるように月寒に北部軍司令部が設置されましたが、彼らの軌跡は「つきさっぷ郷土資料館」などに数多く残されています。

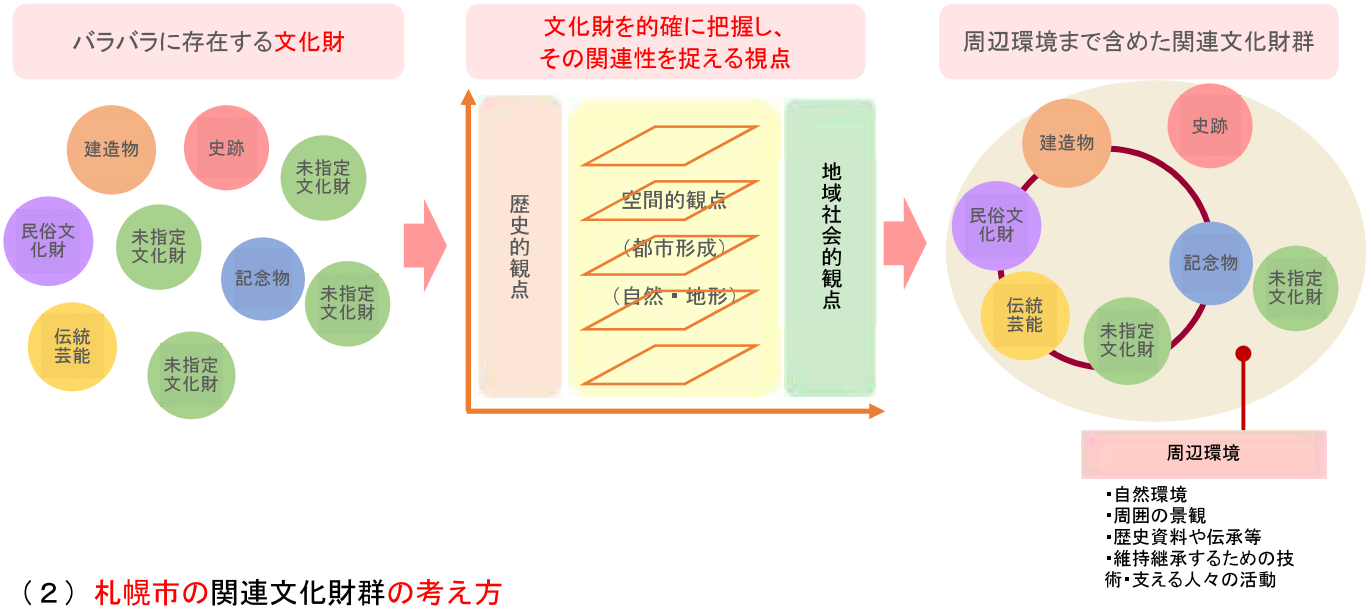


歩兵 25 連隊運動場
出典：札幌市平和バーチャル資料館 HP

２． 関連文化財群設定の考え方

（１）関連文化財群とは

本来文化財とは、文化財単体で成立し価値を形成しているものではなく、人々の暮らしの中で密接に結びついた他の要素と密接な関係を持ちながら形成され、受け継がれてきたものです。関連文化財群とは、文化財をその価値を形成する様々な要素（周辺環境）と一体のものとして捉え、その文化財の本来の価値や魅力を損なわずに将来に引き継いでいくための方策のひとつです。関連文化財群の設定とそのストーリーを整理することで文化財についての理解を深めながら、文化財の保存・活用等の取組みを行っていくことが有効と考えられます。



（２）札幌市の関連文化財群の考え方

札幌市の関連文化財群は、文化財を総合的に保存・活用することの意義を社会全体で共有し、市民とともに、札幌にとってかけがえのない歴史文化の価値を発見し、それらを札幌の魅力資源として活用しながら将来につなげていくためのものです。関連文化財群のつながりや価値、魅力をストーリーでよりわかりやすく伝えることで、その保存・活用に際し多くの市民が共感し、取組みに参加するようになることを目指します。

【札幌市の関連文化財群の考え方】

○札幌の歴史・文化の特徴をよく表し、まとまりとして捉えることで、核となる文化財以外の様々な要素（その他の文化財や周辺環境）が見いだされる結果、札幌の個性や魅力がより際立つようになるもの

○大人から子どもまでが楽しめる物語（ストーリー）によって説明され、これにより、札幌の歴史・文化についての魅力の PR や、理解の促進に貢献するようなもの

○市民が愛着や誇りを感じ、自ら守り伝えていきたいと感じるとともに、その魅力を誰かに伝えたいと感じるようなもの

３． 関連文化財群の例示

札幌市では、関連文化財群をこれから市民とともに見出し、文化財の保存・活用に活かしていきたいと考えています。

以下では、札幌の歴史文化の特徴を反映する関連文化財群を見出すひとつの手掛かりとして、第3章で整理した「札幌の歴史文化の特徴」を軸に、ストーリーと合わせて関連文化財群の構成要素をまとめる例をいくつか示します。この際、市民ワークショップ（第3章-（2）-3））結果や、市民アンケート（第3章-（2）-3））結果、策定委員会での意見などを踏まえることで、市民が自ら語りたくなるような歴史文化のストーリーとなることを考慮しました。

このうち、既に知られた文化財によって一定規模のまとまりをつくることができ、一体的な活用をはかることで魅力資源としての価値や訴求力を高めることをねらいとし、構想策定後、速やかな保存・活用の展開モデルを構築可能と考えられる「開拓使の都市づくり技術とフロンティアスピリット」について、本構想策定後に試行的に事業展開し、今後の保存・活用に具体的に取り組んでいくモデルケースとしていくこととします。

■札幌市の関連文化財群の例

③-1　開拓使の都市づくり技術とフロンティアスピリット

―概要―

明治 2 年に開拓使が設置された札幌。札幌市街地を中心に、開拓使が廃止される明治 15 年までの 13 年間に主に造られた、現在でも見ることができる建物や都市の骨格構造、現在に繋がる都市形成を進めた人物にスポットを当てた関連文化財群です。

―ストーリー―

札幌は明治 2 年(1869 年)、開拓使が設置されたことで本格的な都市づくりがはじまりました。開拓主席判官・島義勇が豊平川の広大な扇状地を見て描いた「五州第一の都（世界一の都）」をつくるという壮大な構想が、今の札幌の市街地の発展に繋がっています。開拓使は明治 15 年(1882 年)に廃止されましたが、その時代に生まれ長い時間の中で醸成されてきた歴史文化が市街地に息づいており、札幌のまちの魅力となっています。

島判官は、「コタンベツの丘（現在の北海道神宮の背後の丘）」から真東を望み、現在の南 1 条通りを東西軸、創成川（当時は大友堀）を南北軸とし、その交点を都市づくりの基点としました。島判官による「石狩国本府指図」には、東西に延びる大通公園が公共的空間として描かれており、また火防線の機能を持たせることで、それより北を官地、南を民地としました。その上で、北西部に官庁・学校、北東部に官営工場、南西部に町屋・住宅、南東部に流通・宿泊施設を設置するというゾーニングの考えを基本に、島判官の後を引き継いだ岩村通俊判官が中心となって、現在の碁盤の目の札幌市街地の原型が形成されました。

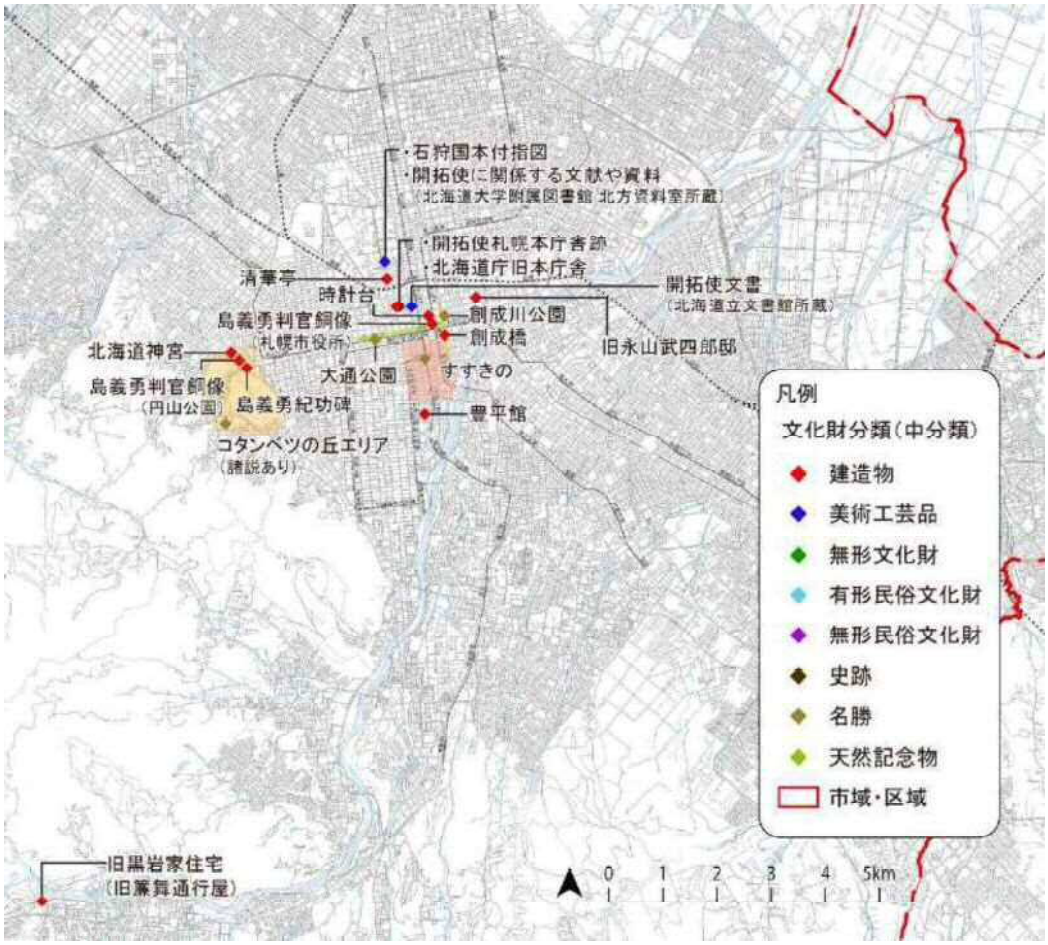
現在でも、北西部には開拓使札幌本庁舎跡や時計台、北東部にはサッポロビール工場などの工場施設が残され、歓楽街として設置された薄野（現在のすすきの）はその位置を留めながら賑わいを見せています。また、札幌建設の基軸となった創成川や大通公園は、役割を変えながら市民や観光客の憩いの空間となっています。

開拓次官（後の長官）黒田清隆はアメリカを中心とした地から、開拓顧問にホーレス・ケプロンをはじめとして、測量・土木のワ―フィールド、農業のエドウィン・ダンなど、多くの外国人技師たちを雇い入れて、先進国の農業・工業の知識や経験、専門技術の導入や機械など近代的なものを受け入れて、開拓の革新を図りました。また、明治 9 年(1876 年)、東京の開拓使仮学校が札幌へ移転し、札幌農学校として開校、ウィリアム・クラークを教頭として迎えました。このように、開拓使時代の札幌には多くのお雇い外国人によって、西洋の文化や技術が導入され、今もどこか異国情緒感じる街並みがあるのはそのためです。

このように、開拓使のフロンティアスピリットが築きあげた都市の基盤や当時の建造物は継承されながら、今日の札幌の街並みの中でその姿と発展を見ることができます。

関連文化財群に含まれる文化財の例

No	名称	No	名称
1	基盤の目のまち	13	黒田清隆
2	創成橋	14	ホーレス・ケプロン
3	開拓使札幌本庁舎跡	15	ワーフィールド
4	北海道神宮	16	エドウィン・ダン
5	時計台	17	ウィリアム・クラーク
6	清華亭	18	島義勇紀功碑
6	北海道庁旧本庁舎	19	島義勇判官銅像
7	豊平館	20	コタンベツの丘
8	永山武四郎邸	21	創成川公園
9	旧黒岩住宅	22	大通公園
10	すすきの	…	……
11	島義勇	…	……
12	岩村通俊	…	……



関連文化財群のマップの例

【関連文化財群の活用例】

- 周遊ガイドブックの作成
- 歴史文化ツーリズムの実施
- 多言語化による観光サインの充実
- 文化財を活用したイベントの開催
- 観光ガイドの要請　　など

①-1　札幌独自の地形・地質と人々の営みの痕跡

―概要―

気候変動による海水面の変化や火山活動、河川の浸食活動などにより、札幌独自の地形が形成されてきました。そのなかで、各時代の人びとは営み、その痕跡が遺跡などとして現在でも目にすることができます。これらの札幌独自の地形とそこに残された人々の営みの痕跡を一定のまとまりとして捉えた関連文化財群です。

―ストーリー―

現在の札幌にある山地、台地・丘陵地、扇状地、低湿地の 4 つの地勢は、気候変動による海水面の変化や火山活動、河川の浸食活動などにより形成されました。また、札幌市内では 1 万数千年前以降の人々が生活をしていたことを物語る遺跡が発見されています。これらの人々の営みの痕跡をひも解くことで、当時の人びとが暮らした地形と暮らしをうかがい知ることができます。

縄文文化早期の遺跡は、比較的標高の高い台地や丘陵地に最も多く分布し、縄文文化前期の遺跡は豊平川扇状地や発寒川扇状地に多く見られます。続縄文の遺跡は扇端部分に、擦文文化の遺跡は平地で見つかっています。

また開拓期になると、北部の低湿地帯では、現在の「新川」を掘削し低湿地の水を抜いて乾燥させることで、農耕地を拡大しました。

これらのように、札幌に暮らしてきた人々が、札幌独自の地形形成過程の中で、地形に合わせ、地形を活かし、営みを育んできたを痕跡として目にすることができます。

構成要素：扇状地、台地・丘陵地、低湿地、豊平川扇状地、発寒扇状地、T103 遺跡、新川　など

②-1　アイヌ語地名が今に伝えること

―概要―

札幌市内ではアイヌ語地名が多く使われており、その意味をひも解くことで、当時の地形や自然の姿が想像できると同時に、現在も実際に見ることができる地形や自然があります。また、アイヌ語地名の記録やその意味を後世に残してきた資料も残されており、それらを一定のまとまりとして捉えた関連文化財群です。

―ストーリー―

札幌市内の地名や川、山などの名前は多くがアイヌ語に由来しています。アイヌ語に基づく名前があちこちで見られることは、その土地に昔からアイヌ民族が暮らしてきたことを物語っています。地名や川、山などの名前は地域それぞれが持っている自然的背景のもと成立したものや、歴史的な事由によって成立したものなど様々ですが、日常的に使っている地名や地名をひも解くことで、今ではなくなってしまった自然の姿や歴史を想像することができます。

例えば、「豊平＝トイ・ピラ＝裂ける・崖」、「茨戸＝パラ・ト＝広い沼(湖)」、「手稲＝テイネ・イ＝濡るる・ところ」などの地形的特徴に関わる地名、「発寒＝ハチャム(・ペッ)＝ムクドリの多い(川)」などの動植物に関わる地名などがあります。さらに、「琴似」は「コッ・ネ・イ＝窪地になっているところ」という意味であり、サクシュコトニ川（窪地を流れる川のうち、最も豊平川に近い川）は都市化の中で現在は枯れてしまいましたが、偕楽園緑地や北海道大学周辺の川跡では窪んだ地形などに当時の面影をみることができます。その他、偕楽園内にあった「メム＝湧水」である「ヌプサムメム＝野の傍の泉池」、植物園内にあった「ピクシムメム＝浜側を通る泉池」、知事公館内にあった「キムクシメム＝山側を通る泉池」なども、現在は枯れてしまいましたが、人工的に池としてメムを再現していたり、メムの地形が残っていたりと当時の様子を垣間見ることができます。

構成要素：藻岩山（インカルシペ）、豊平（トイ・ピラ）、手稲（テイネ・イ）、サクシュコトニ川、偕楽園緑地、植物園、知事公館、山田秀三、札幌のアイヌ語地名を尋ねて　など

③-2　メムに代表される豊かな水資源が育み発展した産業

―概要―

開拓使が置かれた当時、豊平川の扇状地上にある札幌市街地のいたるところにメム（湧き水）や多数の河川がありました。その豊かな水資源の周辺では、水資源を活用した産業が発展したことで工業地帯となり、今も残る当時の街並みや、当時創業し現在も残る産業を一定のまとまりとして捉えた関連文化財群です。

―ストーリー―

開拓判官島義勇が札幌に描いた夢を基に、既に大友亀太郎が農業用に掘った創成川（旧大友堀）と南 1 条が交わるところを基点とした碁盤の目の街並みとが形成されました。その際、舟運の便だけでなく、豊平川扇状地の豊富な地下水資源も注目されました。メム（湧水）や旧河川等の水の豊富な中心部に、開拓の首府が設置されました（現道庁付近）。また西側には農業・工業試験場を兼ねた偕楽園等、東側には工業局用地（後に製糖・製麦、ビール・酒造工場 等が立地）等が、西側と東側のメム及び旧河川跡周辺に設置されました。開発によってメムは消失してしまいましたが、現在もビールや日本酒は札幌の地下水で作られています。

構成要素：メム、豊平川、扇状地、水、ビール工場、酒造工場、偕楽園、創成川、碁盤の目の街並み　など

④-1　国際都市へと札幌を発展させた冬季オリンピック札幌大会のレガシー

―概要―

昭和 47 年（1972 年）の冬季オリンピック札幌大会に向けて、地下鉄や道路、スポーツ施設、住宅などが開発され国際的にも知られることになった札幌の街は大きく変化しました。昭和 47 年までにつくられ、その姿を変えながらも、現在でも市民の生活に密着した資本を一定のまとまりとして捉えた関連文化財群です。

―ストーリー―

昭和 45 年（1970 年）に冬季オリンピック開催が決定した札幌市は１４の競技場といくつかの大会運営施設を建設し、それらの多くは今も札幌市民に親しまれる形で残されています。
なかでもオリンピックで使用されたコースなどが残るサッポロテイネスキー場や大倉山と宮の森の両ジャンプ競技場は、市内を一望できる観光地として高い人気があります。また真駒内の屋内外競技場はアリーナやスタジアムとしてスケートの国際大会やマラソン大会、ライブイベントなどの会場として盛んに使用されています。さらにオリンピック村に建設されたサービスセンターは、大会後には真駒内緑小学校校舎として、閉校後には子どもを中心とした連携・交流の場を提供する「まこまる」として、その使用方法を変えながら市民生活に溶け込んでいます。

大会関連施設だけではなく、札幌市営地下鉄やさっぽろ地下街、民間企業の社屋なども整備され、これらは札幌のまちの姿を大きく変化させました。札幌オリンピックでの都市開発で生まれた資本は、今も札幌市民にとって欠くことのできないものです。

構成要素：大倉山ジャンプ競技場、宮の森ジャンプ競技場、サッポロテイネスキー場、札幌市営地下鉄（南北線・東西線・東豊線）、さっぽろ地下街（オーロラタウン・ポールタウン）、まこまる　など

⑤-1　雪を楽しむ暮らし

―概要―

190 万都市でありながら年間 6mもの降雪がある札幌市。そんな冬季環境だからこそ、その雪を楽しむために活発に行われてきた、ウィンタースポーツや独自のイベントを一定のまとまりとして捉えた関連文化財群です。

―ストーリー―

年間 6 メートルもの降雪がある札幌ですが、190 万都市でこれほど降雪があるのは世界でもめずらしいことです。都市の中の大雪は市民生活にとって課題となることも多いものの、札幌市民は昔からその雪を生かして暮らしてきました。特に、自然の中で雪を楽しむ冬登山やスキーは、札幌農学校のスイス人ドイツ語講師ハンス・コラーによって広められ、明治のころから市民に広まっていきました。その後現在でも藻岩山スキー場やサッポロテイネ、札幌国際スキー場など施設も充実し、市民が身近にスキーを楽しんでいます。また、「さっぽろ雪まつり」は、地元の中・高校生が 6 つの雪像を大通公園に設置したことがきっかけで始まり、大通公園をメイン会場としながら今では国内外から観光客が訪れる札幌を代表するイベントとなっています。

構成要素：藻岩山、スキー、ハンス・コラー、雪まつり、大通公園、札幌国際スキー場、サッポロテイネ（手稲山）　など

⑤-2　新緑の中の札幌まつり

―概要―

明治 5 年（1872 年）に始まり、現在も札幌市民にとって初夏を風物詩である札幌まつり。北海道神宮や中島公園等の場所を始めとして、街中を練り歩く神輿御の音楽や各地域の山車、踊りなどを一定のまとまりとして捉えた関連文化財群です。

―ストーリー―

明治 5 年(1872 年)に札幌神社（現北海道神宮）の例祭が 6 月 15 日に決定しましたが、その年は幣帛の到着が遅れたため、7 月 7 日岩村判官参列の元、取り行われたのが札幌まつりの始まりです。明治 10 年(1877)に札幌の人々から神幸を願う声があり、翌年に神輿が巡回したのが、札幌まつりの渡御の始まりでした。その後、現在まで毎年開催されており、新緑に彩られる街中を山車が練り歩く姿や中島公園、北海道神宮での見世物小屋や出店は夏の風物詩となっています。

構成要素：札幌まつり、北海道神宮、北海道頓宮、神輿御の風景、神輿御の衣装や楽器、神輿、山車、見世物小屋　など

⑥-1　大雪に負けない建築技術

―概要―

積雪寒冷地の都市である札幌市だからこそ育まれた建築技術は、冬季の市民の生活を守り豊かにすると同時に独自の景観を形成してきました。それらを一定のまとまりとして捉えた関連文化財群です。

―ストーリー―

昭和 28 年(1953 年)制定の「北海道防寒住宅建設等促進法」により、コンクリートブロック造住宅が法的に推奨されたことを背景に、道内各地のニュータウンで規格住宅が導入され、1960 年代を中心に、分譲住宅として供給した規格型コンクリートブロック造で二重窓の家、通称「三角屋根」が建ち並ぶ街並みは高度経済成長期における北海道の景観の一つとなりました。

その後、断熱材の開発や落雪によるトラブル防止のための無落雪屋根、換気技術の向上と共に高断熱化、高気密化が進められた北方型住宅の開発などにより三角屋根は姿を消し続けていましたが、手稲区の星置地区には当時の三角屋根の住宅がまだ数多く現役として活躍している姿が見られます。リノベーションも行われることで現在のライフスタイルに合った住宅へと変貌を遂げているものもあります。

構成要素:コンクリートブロック造住宅、三角屋根が並ぶ景色、星置地区、二重窓、無落雪屋根　など

⑦-1　愛される古参車輌と新型車両が共存する市電

―概要―

大正時代から市電として市民の足となり、路線の縮小と延伸経て今もなお市民に愛される市電。新車両と古参車輌、それらが同時に走る景観、車輌を支える運転手やメンテナンス技術者などを一定のまとまりとして捉えた関連文化財群です。

―ストーリー―

昭和 40 年ごろをピークに路線の縮小をしてきた市電ですが、平成 25 年(2013 年)には新型低床車両ポラリスが導入され、平成 27 年(2015 年)には、ループ化による路線延伸が行われたことで、札幌の顔としての印象を高めています。現在でも昭和 30 年代に制作された車両が現役で走り、街行く人や乗車する人を懐かしい気持ちにさせてくれます。積雪地特有の車両としてササラ電車があり、冬季のスムーズな運行の立役者として活躍しています。一方、新型低床車両ポラリスやシリウスも新たな顔として活躍しています。古参車輌を大切にしながらも新型車両が走る背景には、車両メンテナンス技術と知識を持つ技術者の支えがあります。

構成要素:M100 形、8500 形、ササラ電車、ポラリス、シリウス、市電の走る景観、事業所職員、車輌メンテナンス技術　など

⑦-2　札幌の経済発展に貢献した元村街道

―概要―

幕末に整備が開始された歴史ある通りである元村街道（ななめ通り）。大友堀とともに札幌の経済発展を支えた街道をはじめ、沿道の歴史的な建築物や工場跡などを一連のまとまりとして捉えた関連文化財群です。

―ストーリー―

ななめ通り（旧元村街道）は、大友亀太郎が慶応 2 年に「大友堀」を掘った頃に、整備が始まった札幌のまちづくりの原点ともいえる歴史ある通りです。

古くから開発され、石狩と札幌を結ぶ流通の基幹として、札幌の経済発展に貢献しました。また明治期には、帝国製麻や札幌麦酒会社をはじめとする官営・民営工場が立ち並び札幌の官と民の経済発展を支えた場所でもあります。

現在は、ななめ通りと呼ばれ地域に親しまれ、札幌最古の寺院である妙見堂や道内最大の山門を持つ大覚寺など歴史ある建物が残されています。

札幌の碁盤の目の街並みが整備される前に開発され、幕府の開発から開拓使、明治期の経済発展までの歴史を偲ぶことができます。

構成要素：元村街道（ななめ通り）、大友亀太郎、札幌村郷土資料館、大覚寺、本龍寺妙見堂、サッポロビール博物館（札幌麦酒会社） など

■見つけてみよう　関連文化財群

関連文化財群やそのストーリーを見出すときに、決まった手法はありません。地域の文化財を調べたうえで関連文化財とストーリーを考えていく方法や、本構想のように地域の歴史文化の特徴から導き出していく方法（Ｐ○○参照）などが考えられます。また、設定後に関連文化財群をどう活かしていくかという視点も重要です。

ここでは、一例として平成30年度に開催した「れきぶんワークショップ」を参考にした手法を紹介します。

1　地域について学び、文化財を出し合う

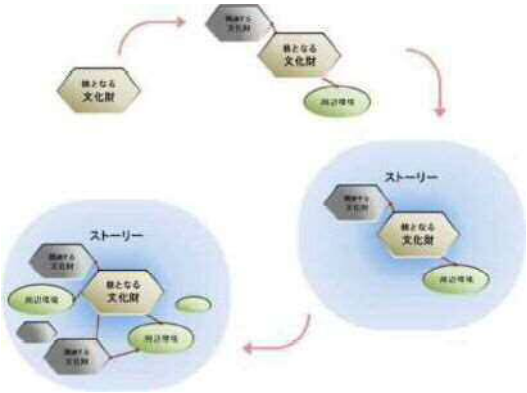
・みんなの考える地域の文化財を出し合います。事前に地域の歴史文化について学び、「地域の人が大切にしているもの」「なくなると寂しいもの」など、具体的にイメージしていきます。
・出された文化財の歴史的背景や地理的背景などの共通点やつながりを見出していきます。
■活動内容例：
●地域の歴史文化及びその特徴についての講演や勉強会/●参加者が考える地域の文化財の共有
●出し合った文化財の地図上へのプロット/●地域を代表する文化財を選ぶ　など

2　文化財を調べる

・地域の文化財についてより深く知り、関連文化財群のストーリーづくりのヒントとなる情報を収集するため現地調査を行います。新たな文化財の発見にもつながります。
■活動内容例：
●地域の文化財についての現地調査（聞き取り調査や見学など）/●地域の文化財についての文献・資料調査/●郷土資料館職員、学芸員などを講師とした講演の実施　など

3　関連性をまとめ、ストーリーを作る

・調査した内容を基に、文化財に共通するキーワードや出来事などから関連性を考え、地図上にプロットしたりしながら、文化財の関連性をまとめます。
・文化財の関連性について、歴史や文化などを踏まえ魅力的に伝えるストーリーを整理します。
■活動内容例：
●地域の文化財とそれにまつわるストーリーの整理（関連する文化財の抽出）
●地域の文化財とそれに関連する文化財の地図上へのプロット
●関連文化財群を魅力的に伝えるキーワードやフレーズの考案　など



（図は仮置き）